

大学授業における日仏の子育てに関する ワークショップの開発と実践ーその2

木 下 裕美子

Workshops on Childrearing in France and Japan: Planning and Implementation in University Class (Part 2)

KINOSHITA Yumiko

Abstract: This paper reports on the final two sessions of a community-engagement workshop held 4 times a year as part of a required university class (the first two sessions were reported in Bulletin Vol.53). This Franco-Japanese cultural exchange initiative aimed to empower participants by looking at the concept of parenthood. This session's theme, "snack time", was examined in terms of cultural significance rather than nutrition. Participants shared what snack time means for the French and their memories of it. Through the workshop, they learned about differences and similarities in the parent-child relationship, living environments and culture. They seemed to enjoy the opportunity paying attention to others gave for quiet self-reflection and fun self-learning.

Key Words: Relaxed cultural exchange, University practicum, Memories of snack time, Empathy and self-reflection

要旨: 本稿は、学科必修授業の中で学生が地域に出向き、年間4回実施したワークショップの記録の一部である。前半2回の実践は紀要53巻で紹介し、つづく後半2回の内容を報告する。本ワークショップは、「親ということ」を通じたエンパワメントを目的として実施された日本とフランスの国際交流の取り組みである。今回のテーマは「おやつ」である。その栄養学的側面を扱うのではなく、文化的営みの場面に注目し、参加者たちがフランス側に薦める「おやつ」や「おやつ」にまつわる思い出を紹介してもらった。この活動を通じ、それぞれの親子関係の様子、生活環境や文化の違いや共通点を知ることができた。さらに、他者への興味から自己を振り返る休息の時間や個人として学ぶ楽しさが得られたようであった。

キーワード: ゆるやかな国際交流、授業実践、おやつの記憶、共感と振り返り

1. はじめに

わが国において子育て支援やそれらを支えるコミュニティ活性化に関する議論は尽きることがない。こうした「子育て」に関するテーマを扱い、本学科の必修科目である活動系授業「行動演習Ⅰ」の中で、女性の国際移動に伴う子育て事情や「子どもにとっての成功とは」何かを参加者とともに考えるワークショップを2017年度に4回実施した。前期2回の授業およびワークショップの目的、内容と結果については『甲南女子大学紀要53巻』にて紹介し、学生達が地域での国際交流のハブとなる感覚を養い、大学のもつ地域資源としての可能性を示した。

前期に引き続き2回のワークショップを後期に行い、「おやつ」をテーマにした異文化交流を実施した。フランスでは、1990年に味覚週間と呼ばれるイベントが始まり、学校でも「栄養と味覚に関する知識や認識を高めるべく」(在日フランス大使館ウェブサイト)教育がなされている。その背景には、肥満の増加や低年齢化があり、特に恵まれない層でその傾向は顕著であると指摘されている(同上)。そうした保健医学的な観点から、幼稚園などでの朝のおやつ時間は決められたものでも義務でもないと言われ(éduscol, 2004)、近年、幼稚園などで「おやつ時間」¹⁾を禁止とする通達がでているケースもある(Sénat, 2013)。しかし、家庭内でのおやつまでも禁じているわけではなく、おやつをもたせるという行為は親子関係のシンボルであるといった指摘から学校でのおやつ禁止に反対の声もある(APEPA, 2013)。また、日本では、知育おやつという名称や魅力的なパッケージで誘う多くのおやつが店頭に並び、日仏ともに「おやつ」が消滅する日はこないであろう。そこで、今回、「おやつ」の栄養学的な側面ではなく、文化的な営みの場として注目し、だれといつどのように何を食べていたのか、という思い出を辿りながら、「おやつ」に注目してお互いの生活環境を知ることがテーマに日仏交流を進めていくことにした。参加者の幼少期もしくは子どもにとっての「おやつ」という日常的な出来事の中に、身近でゆるやかな国際交流のきっかけをつかむことを目指したプログラムである。こうした実践から、1つ目に「おやつ」といった話題を通じた他者の文化的営みへの関心の広がり方、2つ目に遠隔でかつ間接的な異文化交流を通じた共感のはぐくみ方について検討したい。日本ではまだまだ国内における異文化との出会いは日常的に場面がないからである。

そこで、本稿では、まず、互いに共通する話題を通じて交流する取り組みの目的、実践の内容を紹介し、ワークショップの結果をまとめ、その可能性について考えてみたい。

2. 「おやつ」をテーマにしたワークショップ

2.1 ワークショップの目的—異文化交流の意義と些細な出来事から意味を手繰る試み

年間4回実施したワークショップに共通する目的として以下が挙げられる。フランス側の参加者に対しては、他者である日本の親が発信する意見を自分たちの意見と共通点を探りながら比較してもらい親としての自信につながり可能性を検討することである。そして、日本側の参加者にとっては、親であることを通じた共通のテーマに関心を寄せ、「おしゃべり」することとその内容を伝えることによって、互いに「内在する資源に働きかけること」(森田)が可能であることを感じてもらうことである。前期は文化的知識や教養に関する話題を多く取り込んだワークショップであった一方、後期は「おやつ」をテーマにして、参加者個人あての関心に焦点を当てた。「おやつ」をテーマにしたのは、「国民栄養調査」や「乳幼児栄養調査」(厚生労働省)の質問にもみられるように、親が子どもに与えるという行為をとるからである。おやつを与える際には、おやつの栄養学的意義だけでなく、しつけ面や教育面といったことへの配慮が言及され(藤沢, 1997, p.96)、将来的なメタボリック症候群を心配しつつも、栄養補給や子どもの楽しみとして肯定的に捉えられる側面がある。このように心配と喜びが混在する行為に対して、親たちはそれぞれの価値観で「おやつ」の時間を子供たちと過ごしていると考えられよう。特段語れることもない些細な「おやつ」の時間を通じて家族的文化的な価値を親子は共有していると考えられる。

一方、こうした些細な出来事の積み重ねからなる子育ては私的な空間で行われ、公的な教育空間と分断されていると見做され、家族の価値観は私的な空間に閉じ込められがちになる。しかし、こうした私的な体験を通じた公的な場づくりにおいて、家族関係や文化に気づき、振り返り、自己の日常的な営みを有機的に公的な空間と結びつけることができるのではないだろうか。なぜならこうした実践と省察を重ねる活動は肯定的な効果を持ち、新しい意味を創出する活動となる可能性があることが指摘されているからである(Thollon-Behar, 2012, p.14)。

したがって、本実践では、遠隔の異文化交流による共感を創造する力について、その可能性を探ることを目指す。それは、参加者たちが自己と他者の思い出にともなう感情経験を交差させることによって、新しい公共性を創出する可能性を探ることである。また、日仏の参加者たちはおやつというの日常生活のひとつの出来事を想起することを通じて、それにまつわる個人や家族のエピソードを再構成し、家族関係を物語る(Muxel, 1999)ことから、日仏それぞれが語る家族の多様性とおやつとの関わり方について参加者たちの理解を深めることができる

1) 1950年代、栄養不足を補う目的で collation matinale 午前中の間食が学校に取り入れた。(SIRESCO ウェブサイト)

と考え、ワークショップを実施している。

2.2 ワークショップの準備

本研究で対象とした授業内で展開したワークショップは、前回同様、筆者がフランス・イゼール県福祉センターのソーシャルワーカーと IFTS（ソーシャルワーカー養成研修機関）教育研究者とともに実施した「おやつとおしゃべり」と題した交流計画の一環である。日本では神戸市東灘区にある NPO 法人子育て支援ネットワークの保育ルームの協力を得て実施した。日本側のワークショップに参加するのは子育てをしている親、ファシリテーターとしての学生と日本で子育てをした経験のあるフランス人である。

日仏の参加者たちにお勧めのおやつ、自分が子どもの頃にたべていたおやつ、今、自分の子どもたちに与えているおやつについて、エピソードとともに記述してもらい、双方で交換しあうことにした。そして、紹介された中から一つを選んで試食する会を設けることにした。

まず、日本側からフランス側にレシピ紹介をするためのきっかけづくりとして、フランス側のおやつレシピの冊子と、おやつエピソード収集カードを作成した。2016年3月に教員がフランス側に内容を伝え、フランス側はワークショップ参加者から情報収集をし、10月10日に回答が纏められた冊子が日本側に送られた（写真1）。

本実践は「行動演習Ⅱ」と連動させて行っており、ワークショップ実施に備え、日仏それぞれの食育やおやつ事情に関する資料講読を通じてフランスの食文化を各自理解しながら、当日のプログラム設計を行うと同時にチラシ作成および児童館への配布を行っている。後半2回のうち1回目のワークショップは後期授業が始まって早い時期（10月20日）に実施されるため、教員がフランス側から提供された情報の翻訳を担当した。2回目は11月24日に開催され、フランスから紹介をうけたおやつを試食することとした。加えて、前期に作成した遊び（子守唄、オノマトペカード）を活用することにした。特に、日本の「おやつ」の場面では「オノマトペ」が多く出てくることに注目し、フランス語・文化事情に関するアクティビティとして、日仏の音の違いについてオノマトペゲームを企画した。さらに、おやつを日常のおやつと特別なイベントに登場するおやつに区別し、フランスの文化・慣習と合わせて紹介できるように、学生達はフランス人講師に聞き取りをしながらエピソードの内容を整理し、プログラム内容を検討し、時間配分について確認した。

2.3 ワークショップの内容

ワークショップは1年に4回実施することを計画しており、本稿は後期2回の「おやつの会」の活動報告である。第3回目のワークショップでは、フランス側から送られてきたおやつのレシピの紹介と日本から送るおやつの思い出とレシピの収集、第4回目では、フランス側から紹介されたおやつのうちひとつを実習と試食をし、フランス語・文化事情に関するアクティビティを行っている。具体的な内容は以下である。

2.3.1 第3回ワークショップ

日時は2016年10月20日（木）10時から11時20分を予定した。フランス側から送られてきたお勧めレシピとエピソードの紹介をしながら、参加者からおやつに関する回答を収集した。回答は次の4つの質問に対するものである。①おやつの時間をどう思うか、②自分自身（親自身）のおやつの思い出やエピソード、③現在、子どもたちにあげているおやつ、④自分のオリジナルのおやつメニュー、である。それぞれの回答にはその理由や関連する思い出、エピソードなどを自由に記述してもらった。

参加者数は以下の通りである。

- ・親8名（すべて母親、子どもの年齢は3歳児未満）
- ・NPOスタッフ1名（途中出入りあり）

Les goûters en France

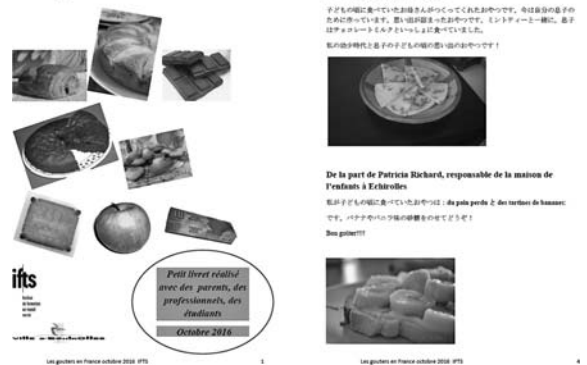


写真1 フランス側から届いた冊子に日本語訳をつけた配布資料の一部



写真2 おすすめの「おやつ」レシピやエピソードカード



写真3 ワークショップ参加者同士の「おやつ」紹介

- ・教員 2 名 (「行動演習」担当者 1 名, フランス人講師 1 名)
- ・学生 5 名 (「卒業研究」4 年生)

第 3 回のワークショップ実施もこれまで同様、「行動演習Ⅱ」の学生がファシリテーターとなる予定であったが、体調不良により欠席せざるとえない状況となった。そこで、急遽「行動演習Ⅱ」担当者がファシリテーターの代行をするとともに、フランス語を使ったワークショップに関心のあるフランス語科目履修済み、かつ卒業研究履修学生 (4 年生) が見学を兼ねて、子どもたちの遊び相手としてサポート役を担当してくれることになった。

参加する親たちは 4 人ずつの 2 つのグループに分かれ、4 つの項目ごとに色を分けたカードが渡され、作業を行った (写真 2)。前半のワークショップ同様、プログラム進行は、「導入」、「作業」と「まとめ」から成り立っている。

まず、導入として、和やかな雰囲気をつくることを目的として、おやつをテーマにした童謡「Dame Tartine」をみんなで練習し、子どもと一緒にフランス語の音とリズムで遊ぶことにした。次に、作業は 2 つの部に分かれている。1 つ目は、フランス側から送られてきたレシピとその思い出について、フランス人講師が説明し、参加者からの質問への対応である。2 つ目は、4 つの項目ごとに時間を区切り、個人作業とメンバーに紹介を行うグループ作業とし、参加者同士の「おやつ」紹介を通じた交流と息抜きの場としてもらうこととした。その様子を写真 3 に示す。

2.3.2 第 4 回ワークショップ

日時は 2016 年 11 月 24 日 (木) 10 時から 12 時を予定した。おやつの実習と試食およびフランス語の擬態語 (オノマトペ) ゲームや子守唄などの歌遊びをしながら、参加者同士の交流をはかった。

参加者数は以下の通りである。

- ・親 9 名 (すべて母親, 子どもの年齢は 3 歳児未満)
- ・NPO スタッフ 1 名 (途中出入りあり)
- ・教員 2 名 (フランス語科目担当者 1 名, フランス人講師 1 名)
- ・学生 2 名 (「行動演習Ⅱ」2 年生)
- ・フランス語科目履修学生 5 名

第 3 回のワークショップで紹介したフランスの参加者にとっての普段のおやつの中からヨーグルトケーキを選び、「行動演習Ⅱ」の学生がデモンストレーターとなって実習し (写真 4)、参加者と一緒に試食し、その様子や感想を後日フランス側に送ることを目的として実施した。フランス語科目履修学生は別室にて、フランス語でレシピを読み、家族のおやつについて知るなど食文化講座の一環としてヨーグルトケーキ実習を行っている。

フランスの親たちがヨーグルトケーキをおやつとして作る理由として、子どもたちと一緒につくれることや材料の計量にはそれらの入ったカップなどを使うといった準備が簡単である点が挙げられる。このように、簡単に「子どもと一緒に」作るおやつとして紹介したのだが、今回の調理担当は学生のみとしている。その理由は、実習先の NPO 法人の規則により食品を扱う場合に検便等の保健検査が事前に求められていたため、参加者にこうした検査を事前に要求するのは負担が大きいと考えたためである。



写真4 ヨーグルトケーキ実習



写真5 オノマトペゲーム

10時からプログラムを開始し、まず、学生達は2種類のヨーグルトケーキのレシピをホワイトボードに張り、フランス人講師とともに紹介をし、参加者からの質問に答えながら調理を進めていった。複数のケーキが焼きあがるまでの間、フランス語文化紹介の時間をもうけ、擬音語（オノマトペ）が「おやつ」や調理の場面にしばしばでてくることから、日仏の音の違いについてゲームを行った（写真5）。このオノマトペゲームには子どもが参加することを想定していたため、目でみて分かりやすい生き物や乗り物などの絵を用いることにし、それらのオノマトペを用意した。また、これまでのワークショップで十分に共有できなかった子どもの歌、子守唄や数え歌などを紹介し、参加者とともに練習をし、子どもと一緒に謳って遊んでもらえるようにした。

第3回と4回の様子および、第3回で聞き取ったレシピとエピソードは、フランス語に翻訳して、2017年3月にフランス側の参加者に渡し、そのメンバーたちは日本からのお勧めレシピを調理、試食し、その様子を映像に記録し、日本のおやつに対するコメントをした。

これらの年間を通じた4回の活動内容や日本の参加者によるアンケート内容、日仏で交換したレシピや参加者それぞれのエピソードは、学生たちが「行動演習Ⅱ」の授業の中で年間活動報告書としてまとめ、ワークショップ協力団体へ送付している。

3. ワークショップの結果

上記2回のワークショップの結果について、参加者アンケートから成果と限界について以下に述べる。

3.1 ワークショップの成果

前半2回のワークショップ同様、「他の方のおやつ事情も聞けて、これから参考にしたいです」、「皆さんのおやつレシピが参考になりました」、「おやつのお話を話し合ったりできた」といったように、日本人の親同士の交流も行われ、「自分のホッとする時間、コミュニケーションの機会にしたいです。」「改めておやつについて考える機会になりました」、「子供もほかの子がいる環境においてやれることが出来た」といったように、リフレッシュする機会を提供することができたようだ。

また、どの回にも国際交流に関心があったり、参加者自身に海外経験があったり、「(本学教員)に会えたこと」が肯定的に語られるなど、現在異文化の現場にいたりするような人々が集まる場として、フランスを問わず異文化的背景を潜在的にもつ人々と出会うようにワークショップの場が機能しているケースが見られた。直接交流する相手として、「フランス人」ではなくても、異文化と潜在的に関連のある、自分と差異のある人たちが同様の関心をもつ自分と近似する人たちとの交流が出来ると考えられる。しかし、こうした差異と近似が共存している空間における参加者たちの変化を知るために意見を聞きとる時間がとれなかった。

さらに、満足した理由として「日々育児の生活で今の学生さんの年代の方と触れ合うことがなかなかないのでとても新鮮でした」、「(教員)に会うことができたから」といった感想が上げられ、学生との異世代交流や大学教員とのかわりについて肯定的な感想がみられた。このことから、大学によるアウトリーチ活動は親たちにとって、世代間および異文化交流として期待される活動であることが明らかである。

親たちの異文化への関心が高いのはもとより、「普段のおやつを教えて下さり、ありがとうございました。知る

手段があまりなかったのでよかった」, 「フランスの家庭のおやつをすることができた」という感想にみられるように, フランス人に特別に尋ねたりするような話題でもない普通のおやつをテーマに取り組んだことに対する評価がみられた。これは, 取り立てて扱われることもない, 日常に埋め込まれたありふれた出来事を異文化交流のテーマとして扱うことが意義をもつものとして考えられることを示唆する。

また, 「思い切って応募してよかった」, 「時間が足りず(…)もったいない」, 「もう少し書く時間がほしいです!」, 「時間が足りなかった」という感想から, 参加者たちは子どものためというより個人として楽しむことができた様子が伺える。このことから, 「異文化交流」に対する潜在的な参加のニーズは高いと考えられる。

3.2 遠隔で間接的に行われる異文化交流としての限界

次に, 日仏の参加者が離れたままで行く遠隔ワークショップであることに伴う難しさについて述べたい。

前半の第2回目のワークショップにおいて, フランス人講師が参加できなかったため, 参加者の意見の中に, 「異文化交流というより, 研究材料になった」という回答があった。この点については, 「異文化交流」という言葉に反応して参加したのに想定と異なり, 「フランス人との(直接の)交流がなかった」「フランス人に会えなかった」ので不満であるという意見と関連すると考えられた。そこで, 今回紹介した2回のワークショップでは, 学生ファシリテーターとフランス人講師ペアの司会進行を必須とした上で, 研究者である教員の介入は最小限度にしなが, 以下の点に留意した。まず, これまでのワークショップについてフランス側から提供された情報やコメントを冊子にして丁寧に伝えることにより, 目の前にいない他者との交流に実感をもてるようにすること, そして, フランスにおける子育てや教育事情に関する相手の文化や制度に関する補足情報を伝えることによって, 参加者とともにフランスの状況を理解し, その情報をもとに参加者同士の意見交換を促進し, 異文化交流のあり方に変化をもたらしている可能性を実感してもらうことである。その結果として, 「フランスのお母さんたちのレシピが生の声でそのまま翻訳されていて見ていて楽しかったです」や「フランスのおやつ事情が分かってよかったです。」といった回答が得られたと考えられる。

一方で, 回答には, 「フランス文化をA先生からいろいろ聞いたのが楽しかった」, 「A先生にお会いできた」, 「フランス文化を教えてくださいましたA先生」といったように, 交流会を学生とペアで進行するフランス人講師への言及が目立ち, 直接的な交流があったことに対する満足度が高く, 同じテーマで取り組んでいるフランス側の親への関心がどうしても後景化してしまったことが分かる。参加者アンケートの項目として, フランス側の参加者へのメッセージや質問が用意されていたが, 提供されたレシピへの感謝以外にワークショップのなかで紹介された内容や相手の生活や文化に関連づけた質問はみられなかった。その原因のひとつは, ワークショップの導入やアンケート協力の際に説明が不足していたためと考えられる。

こうした直接交流を望む声の中にも, 「第1回から4回までの結果やフランスでの様子が見てみたいです」といったように遠隔で同じテーマでワークショップを行うフランスの親たちの取り組みとその様子に関する報告を望む回答がみられた。この回答から遠隔ワークショップについて次の可能性が考えられる。目の前にいる他者(ここでは, フランス人講師)との直接的な交流だけではなく, 共通のテーマで活動している遠くに離れた他者に関する丁寧な報告を重ねることで, 遠くの他者の日常に対する関心と重なり合い, 見えない参加者への想像力が喚起され, 交流の相手に直接問いかけをしたいという思いを抱くようになったことである。異文化を背景とした人々との出会いが多くないと認識されている日本において, 遠隔のまま行う異文化交流ワークショップは現実的であり, かつ離れた他者への関心を喚起し, 相手を自分の日常に引き寄せ, 共同で作業している実感をもつように橋渡しする可能性があると考えられる。したがって, 遠隔のまま行うワークショップには, 継続的に実施し, 双方のこれまでの活動に関する報告を画像や動画を多用して行ったり, そのために相手から自分に向かう関心や反応を出来る限り多く収集したりしながら, 報告書として形に残すことによって相手から参加者へのまなごしを意識させる場面を多くつくることで改善することが可能であろう。

今回のワークショップで得られた感想から考えられる「遠隔のまま」行う異文化交流の難しさは, 異なる文化の出身者から直接話を聞きたいという気持ちが直接会うことのできる代替者によって満たされたとき, 遠くにいて共通テーマで実際に活動を「共」にした他者への具体的な関心につながりにくい点である。参加者たちは, 「おやつ」を通じた自伝的記憶を通じて, 親であることや家族, 個人のアイデンティティの多様性を知る機会として

このワークショップを経験した。しかし、異文化を表出すると自分が思い描く他者を目の前に活動を共にしない限り、「異文化交流」という言葉に対する期待は裏切られたように感じられ、間接的な異文化交流の意義は創出されにくい。さらに、参加者同士の交流を深める工夫が不足していたために、フランス人講師と参加者ひとりひとりの1対1の直接的な交流となってしまう傾向が強くなり、フランス側の参加者の存在が意識されにくくなった。

今後はこれら改善点を踏まえ、遠隔で行うワークショップの開発・実践を継続的行なうとともに、参加者たちがもつ力を異文化交流の場面においてどのように他者につなぐことができるのかについて検討することが求められる。

4. まとめと今後の課題

本稿では、年間4回行われた国際交流を通じた子育て支援をサポートすることを目的とした後期2回のワークショップが分析対象であった。前号での報告のなかで、学生の学習状況と参加者満足度を重ね合わせてワークショップ実施運営の課題を探ったこととは異なり、以下の2つの観点に着目して今回の内容と結果を紹介した。1つ目は「おやつ」といった話題を通じた他者の文化的営みへの関心の広がりや共感に基づいた振り返りのきっかけ作り、2つ目は、遠隔のままで異文化交流を行うことで見出せる意義と可能性である。前者については、ワークを取り入れた活動を通じて参加者同士および異文化紹介の合間に活発なコミュニケーションが見られたことやアンケート内容から成果があったと考えられる。一方、異文化という自分との差異のある人たちとの交流と、その交流を求めてワークショップの場に集まる自分に近似する人たちとの交流が共存する空間における参加者たちの振舞いについて観察する時間がなく、その変化を追うことができなかった。つまり、2つ目の観点から、遠くの他者と連動した活動であることの理解を深め、その共同性を実感できる工夫が不十分であったことが浮かび上がった。

今後はこれらの改善点を踏まえ、遠くの他者との共同性を生み出す方法とその意義について検討することが課題である。

謝辞

フランスの教育における間食に関する議論について情報提供をいただいた Bonnabesse 氏、フランス・エシロルで活動する親の会の代表者 Laetitia さん、中心的に活動する Faouzia さん、Kaokeb さん、Soafia さん、Nadia さんたち、そして、アクション・リサーチを支える託児施設長の Sylvie さんと Djamilia さん、および、子育て支援ネットワークあいさんとその参加者の皆様のご意見に感謝いたします。そして、第3回ワークショップでサポート役を担ってくれた木下ゼミの4年生5名（岩野さん、西口さん、森田さん、松本さん、村田さん）にもお礼を伝えたい。

参考文献

- 藤沢良知『子どもの食育を考える－生活習慣病時代の保育所給食を中心に』第一出版, 1997
 片桐雅隆『過去と記憶の社会学 自己論からの展開』世界思想社, 2003
 森田ゆり『エンパワメントと人権』解放出版社, 1998
 崎山治男『「心の時代」と自己－感情社会学の視座』勁草書房, 2005
 在日フランス大使館「フランスの食育政策」(日付不明) <http://www.ambafrance-jp.org/spip.php?article 2293> (最終閲覧日 2016年9月7日, 2017年11月4日現在情報なし)
 筒井真優美編著『アクションリサーチ入門－看護研究の新たなステージへ』ライフサポート社, 2010
 AFSSA (現在 ANSES), *Préférons le petite déjeuner à la collation matinale*, (日付不明)
<https://www.anses.fr/fr/system/files/PASER-Fi-CollationMat.pdf> (最終閲覧日 2017年11月4日)
 APEPA, *Levée de boucliers contre la suppression du goûter à l'école*, 2013
<http://www.apepa.fr/actions-apepa/petition-oui-aux-gouters-a-lecole-dans-le-haut-rhin/> (最終閲覧日 2017年11月4日)
 Éduscol, *Éducation à l'alimentation*, 2004
<http://eduscol.education.fr/cid 47662/decouvrir-alimentation.html> (最終閲覧日 2017年11月4日)
 Muxel, Anne, *Individu et mémoire familiale*, Nathan, 1999
 Sénat, *Collation matinale à l'école*, 14^e législature, 2013
<https://www.senat.fr/questions/base/2013/qSEQ130908172.html> (最終閲覧日 2017年11月4日)
 SIRESCO, *La collation matinale est-elle nécessaire?* (日付不明)

<http://www.siresco.fr/qualite/actions-de-prevention-sante/bien-etre/la-collation-matinale-est-elle-necessaire> (最終閲覧日 2017 年 11 月 4 日)

Thollen-Behar, Marie-Paule, Dynamiser les pratiques professionnelles de la petite enfance, La recherche-action, un outil, Chronique Sociale, 2012